



TITLE:

那須野悟氏を偲んで

AUTHOR(S):

早川, 美德

---

CITATION:

早川, 美德. 那須野悟氏を偲んで. 物性研究 2002, 79(1): 1-1

ISSUE DATE:

2002-10-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/97296>

RIGHT:

## 那須野悟氏を偲んで

東北大理 早川 美徳  
(hida@cmpt.phys.tohoku.ac.jp)

(2002 年 9 月 11 日受理)

那須野悟（なすのさとる）さんが、7月29日、東京の自宅で亡くなられた。まだ40歳の若さであった。那須野さんは、東北大学電気通信研究所の沢田康次氏の研究室で学位を取得後、九州工業大学の助手に着任後、助教授を経て、この4月から学習院大学理学部の教授に着任されたばかりであった。私も含め 周囲の人たちは皆 新天地での一層の活躍を期待していただけに、訃報を耳にした時は、信じられない思いだった。

那須野さんは東北大工学部の電気系に入学し、配属先の研究室を決めるじゃんけんに「敗れて」、沢田研に入ったそうである。その後の活躍を思えば少し不思議な気もするが、少なくとも、それが彼がこの方面に入った直接のきっかけだったようだ。当時の沢田研では、松下貢（中央大）、宮野健次郎（東大）、佐野雅己（東大）といった面々と沢田康次氏が、いつも熱い議論を交わしていて、配属になった学生はみな当惑したものだ。そんな空気の中、暗くした部屋でアスペクト比の大きいレーリーベナール対流や液晶対流系の実験を一人でこつこつとこなしていた様子が今でも思い出される。九工大に移ってからも、液晶を使った時空カオスやパターン形成などの研究を精力的に行い、この分野の中心の一つ貴重な実験家であったことは言うまでもないだろう。

その後、粉粒体の実験なども手がけるようになり、97年頃にHaverford大のJerry Gollubの研究室に滞在中に行なった粉体上での摩擦の実験は、Physics Todayなどにも紹介され、ご存知の方も多いと思う。ちょうどアメリカからの帰国直後に、小さな研究会でこの話を聞いたときは、その着眼点の面白さと綺麗なデータに、感じ入ったものだ。

今年のはじめ、ある研究会の用事で、九工大の研究室を見せていただく機会があった。引越し直前ということもあってか、オフィスも実験室も雑然としていたけれども、本格的な研究の芽になるかもしれないような、面白いものがあちこちに転がっていて、話しをしているうちにあっという間に時間が過ぎた。もし彼がこのまま研究を続けていれば、と思うと、本当に残念でならない。

彼は随分前から放電によるパターン形成を調べていて、その時も、実験のビデオを見ながら、よい公表の場に恵まれないので困っている、といった話しをしていた。「その現象は専門家の間では昔から知られていて、今更、何故そんなことを調べるのか」といった風なレスポンスばかりという。どこかの雑誌に掲載しようと思えばそれほど難しくはないようにも思われたけれども、ひょっとすると彼流の美意識で、綺麗な「落としどころ」をまだ模索していたのかもしれない。

大学院生の頃、何かお奨めのCDはないかと彼に尋ねたところ、少し考えてから、グールドのバッハを教えてくれた。久しぶりにそのCDを取り出して聴いていると、その音符の連なりは、那須野さんの几帳面な実験データのプロットとどこか似ているように思われた。心からご冥福をお祈りいたします。